

## 6. 「華語萃編と中日大辞典」

今泉 潤太郎

葉 続きまして、愛知大学の今泉先生です。中日大辞典についてのお話をいただきます。これは日本において影響があるだけではなく、中国においても非常によく知られています。本日はこの辞典の経緯についてお話しさせていただきたいと思ます。

今泉 私は、同文書院の中国語の教育の面では『華語萃編』、そして中国語研究の面で華日辞典、のちに愛知大学で出版した『中日大辞典』、この二つについて簡単にご報告をいたします。

同文書院の中国語が重要な科目であることはいうまでもありません。中国関連のその他の科目と並んで、その専門の科目のための道具として、それ自体を研究の対象とするのではなく奉仕するといひましようか、そういう中国語、外国語として位置づけられております。中国語は同文書院の中でも重要な科目ですので、その時間数も相当多し、中国語の教員も中国人、日本人合わせて相当数にのぼります。全体の3分の1強の人数を占めているわけです。

科目のほうでは華語、当初は清語、あるいは支那語、そして華語という名称になりますが、これはいわゆる北京語です。そのほかに時文、尺牘があり、これら全部が中国語です。そのほかに漢文というのがあります。日本人の年配の方ならば、戦前の国語、漢文についてはご存じのとおり、主として江戸期の日本人漢学者の著作を教科書とします。他にも中国の原典、たとえば論語や唐宋八家文、唐詩選といったものからも選ばれております。これは、時文と非常に関連が深い。つまり、漢文から中国文言文の体系、文法を習得しているわけです。中学卒業生が同文書院に入りますので、彼らにとって時文は比較的なじみがある科目だと思ます。

しかし、中国語・北京語についてはまるで初めての外国語です。とりわけ中国人の話す言葉を耳で聞いて理解し、かつ日本人である同文書院の学生が自分の口を使って中国人に話す。当たり前のことですが、こういった教育は日本の高等教育ではほとんどなかったといってもいいと思ます。ご存じのとおり、日本の大学とりわけ帝国大学では英・仏・独の3カ国語の学習をもっぱら進んだ西欧文明を理解する、目で見て理解するための道具として位置づけ、読解することを最大の目的としていました。

さて、明治期の日本人は多くの北京語を学ぶ者は、「官話指南」という中国人が書いた教科書から始めたようです。同文書院の開設の時期には、同文書院の前身である日清貿易研究所の中国語教員の御幡雅文という方が中国語教員として赴任します。また、日清貿易研究所で御幡から学んで、かつ同文書院で中国語を教える青木喬という方が、先ほどの尺牘を担当します。この2人が、主として1～10期生ぐらまでの学生の中国語の教員です。

この方々に指導されて、いわば自前の同文書院の学生から育った中国語の教員が誕生します。たとえば2期の真島次郎、4期の松永千秋等で、その後には12期の清水董三、15期の鈴木擇郎がいます。この鈴木擇郎先生は愛知大学創設以来の中国語の教員でもあり、私を含めて会場におみえの何人かも直接指導を受けています。

この同文書院で育った教員の人たちが、初めて自分たちの中国語教科書をつくります。それが『華語萃編』です。『華語萃編』の完成は1916年、大正年間になってからです。その間は、先ほど言った御幡雅文自身がつくった『華語跬歩』を主として学んでいたようです。



『華語萃編』は初集、2集、3集、4集とあり、第1学年、2年、3年、4年と上に上がっていくわけです。このシリーズが完全にできるのはやや遅れて1933年、昭和になってからのことです。ですから、『華語萃編』で初集から4集まですべて教わった学生は33期生以降ということになります。

同文書院は半世紀近く教育活動を行います。私がいま申し上げているのは初期の5～6年間、それから最後、戦争の激しくなった40年以降です。ですから、これらの間を取った平均的なこととしてお聞きください。

この『華語萃編』は問答形式です。一問一答のかたちの会話教科書で、初集は日常生活の会話を中心として始まり、やや複雑な会話として2集、さらに3集になりますと商業や金融業、農工業、あるいは一般家庭、新しい市民生活が始まると新文明の知識なども盛り込んでいます。4集はかなり高級で、初めから高級会話を取得することを目的としています。たとえばこういう公開の席での演説や歓迎会の式辞、送別の辞、外交辞令等々です。こうして『華語萃編』の初集から4集をやって、最後の学年にいわゆる大旅行に出かける。そのための「旅行用語」を習いました。

これらは洗練された中国文で、当然これには同文書院の中国語教員の約半数を占めている中国人教員の手が加わっている。学生はこれを始めから終わりまで暗唱することを科せられています。特に初集は発音教材として徹底的に暗唱させられます。日本人はなかなか身につかぬ四声や、発音がしにくいといわれる翹舌音・北京語にある発音、寛音と窄音の区別、日本語では重念と言っている強くストレスをかけるところ、逆に軽く発音するところなど、実際に耳で聞いて覚えるのは非常に難しいのですが、こういうものもすべて暗唱させることによってマスターさせるという教育法を取りました。

また、同文書院ではこれを実際に実現可能とさ

せる環境がありました。上級生が下級生に教科書を暗唱させるのです。発音を訂正しながら暗唱させます。特に新入生に対して、夏休み前の2～3カ月間で基本的なベースになるものを皆覚えさせてしまうという猛烈なやり方です。教室で教わったことを学ぶだけではとてもできません。上級生が下級生を指導するということが教育の中に位置づけられている結果として、それが可能であったということです。同じ寮に全員が居住していて、上級生・下級生の関係が非常に濃密です。一般の生活も、学習生活も、同時並行的に行われているという環境があったからに違いありません。

この『華語萃編』は30年余り使用されますので、内容上、大小の修正を経ています。発音の面でも、たとえば中国で国音の統一、注音字母の制定がありました。注音字母というのは中国独自の発音表記法ですが、こういったものが中国政府によって制定される。そういうものを教科書に反映させながら、なおかつ清末から中華民国にかけて、特に1930年代に入ると、近代化されていく中国の現状に合わせて内容も修正されていくわけです。しかし、その骨格ともいべきものは変更されませんでした。

同文書院は1945年に廃校となり、『華語萃編』も同時になくなります。ただ、ご存じのとおり、愛知大学は同文書院を継承する学校ということで、同文書院最後の学長の本間喜一先生が創始者で建てられた大学です。中国語のスタッフも、鈴木先生を始めとして複数の方がいらっしゃる。たとえば、今日午前中おめにかかった池上貞一先生もそうですが、同文書院の多くの教員がこの愛知大学でも教えるという体制でした。

そして、同文書院の中国語教員はほとんど全員が、ほとんどといいますのは他の大学出身で採用された中国語教員の方が唯お一人おられました。そのほかは全部同文書院で学び、同文書院で教えるというかたちです。愛知大学でも同様に、当初は愛知大学も『華語萃編』を教科書としまし

た。この会場にも『華語萃編』で学んだ愛知大学卒業生が多数おられると思います。私自身も『華語萃編』で学びました。その後この大学で教師となりましたので、私も数年間『華語萃編』を教えました。

結局、『華語萃編』は、同文書院から切り離すことはできない。同文書院あつての『華語萃編』だろうと思います。これは教学関係が他とまったく違う独特のものということです。簡単にいえば、中国の上海にあった同文書院だからこそ使えた。あるいは、中国人教員と日本人教員が常にペアになって教室で教えるという、非常に恵まれた環境にあった。さらに、その前提として学生が初めから同文書院に入学するつもりで入学してくる。つまり動機づけが十分であったとっていい。これらの要素が集約された所に同文書院の中国語教育があったのです。以上、簡単ですが中国語教育の面についてお話ししました。

次に同文書院の中国語研究の面でどうであったかということ、華日辞典の編纂という点を通してお話ししたいと思います。以上のように中国人および日本人の中国語教員スタッフが常に十数名いたという環境もありまして、その教員による中国語研究の水準はこれまた高度なものであったと思います。いまわれわれが見ることができるのは、同文書院で出しました「華語月刊」という小冊子ですが、今日は華日辞典の編集について申し上げます。

同文書院の教員組織である華語研究会が華日辞典の編集計画を立てたのは1932～33年、昭和7～8年ごろです。中国では従来伝統的に学者というのは古文を重んじて、現代文、口語文を軽んずるという気風があります。したがって口語辞典に対しても学者の関心度が低い。熱意も低かったわけです。

言語文を対象とする有名な辞典に『辞源』があります。『辞源』は1915年に出版されますが、こ

れは文言を対象としています。現代のものを対象にした『辞海』というものも出ますが、これは1932～33年ごろだと思います。当時は現在と違い中国では口語辞典が非常に少ないのです。日本でも口語辞典、中国語辞典についてはそれほど多くない。代表的なものとして『井上ポケット支那語辞典』というのがあったようですが、これらは学生からいっても不満足なものでした。こういう中で、スタッフが十分いる同文書院の華語研究会のメンバーで辞典をつくらうということになったわけです。

結果として、敗戦時には十数万枚の原稿カードができ上がっていましたが、敗戦によって中国政府に接収されました。戦後中華人民共和国成立後、愛知大学の本間喜一学長が、ぜひこれを返してもらって、愛知大学の手で辞典として完成させることができなかつたということで、いろいろ折衝して、結果的に1954～55年にかけて中国人民保衛世界和平委員会秘書長の劉貫一先生の名義で日本国民に贈られます。これを日中友好協会が責任を持って、もとの同文書院の辞典カードをつくった人たちを集めて会議を開き、愛知大学にその完成が委ねられるわけです。これを完成させたのが、愛知大学の『中日大辞典』です。ですから名前は変わりましたが、この辞典は同文書院の華語研究、中国語研究のいわば基礎に立って、愛知大学でこれを完成させたということができると思います。非常に簡単ですが、以上を報告させていただきました。ありがとうございます。(拍手)

葉 今泉先生、ありがとうございます。教育、研究関係のご紹介について、非常に啓発される場所がありました。『中日大辞典』は第3版が来年出るということです。どなたかご質問はありますでしょうか。もしないようでしたら、このあと質疑の時間がありますので。では、次にいきたいと思います。